

ヘルとデューク
南の島へ行く



1

暖かいところをめざす



暖かいお日さまの光が、今日もぼくにぽかぽかの毛布をかけてくれている。目を閉じていても、まぶたを通りぬけてくる明るい太陽を感じることができる。この暖かいかおり、とても心地よい。こうして日の光を浴びてごろんとしていると、ぼくはつくづくネコでよかったと思う。

「ヘル、今日もまたここだったのか。」

声が聞こえてうす目を開ける。ああ、この気持ちのよいお昼寝のひとつきを終わりにしなければいけないのか。いやだよー。ぼくはそう思いながらゆっくり、そして思いきり足をのばす。そして今度はしぶしぶ、ちゃんと目を開ける。

「やあ、デューク。今日も気持ちのいい天気だね。」

ともだちのデュークがぼくの隣で毛づくろいをはじめていた。ぼくもこのまま太陽の光にあたりながら、手足をなめることにする。

ぼくとデュークはよくこうやって、緑の芝生の上や石の上で昼寝をしたり、二人で町を散歩したりして一日を過ごしている。そして日が暮れると、ぼくらはそれぞれの家に帰る。

ぼくたちは人間の家族といっしょに暮らしている。家ではママがぼくにおいしいごはんを用意してくれる。そして小学校5年生のまりちゃんとぼくは、ぼくが大好きなふさふさの毛がついたぼうを使って一緒に追いかけてっこをして遊ぶ。パパが仕事から戻ると、ぼくをおなかにのせて、ソファで横になりながらテレビをみる。そして、ぼくはぼく専用のベッドで丸くなって寝る。

「もうすぐこの暖かい日々も終わっちゃうんだよな。」

毛づくろいを終えたデュークが言った。

「終わっちゃうって？」

ぼくはおどろいて聞いた。

「そうだよ、もうすぐ冬がくるんだ。もう来週には寒くなるみたいだよ。今朝新聞を見ながらパパが言ってたよ。」

「そうなの？それじゃあ、こうやって外で太陽の光にあたって、気持ちよくお昼寝をすることもできなくなっちゃうんだ。」

ぼくはこの世の終わりをつげられたような気持ちになって言った。冬はいやだ。外の空気はとても冷たい。時には雪が降って地面を歩くことだってできなくなる。ぼくらに話しかけてくれるお花も木の葉もみんないなくなり、なんといっても、お日さまに会える時間が少なくなる。そして、ぼくらは一日中家の中で寝ることが多くなり、こうしてデュークと一緒に外を散歩することも少なくなる。

「人間はいいよな。自分が住んでいるところが寒くなっても、暖かいところに遊びに行くことができるんだろ。前にヘル、そんな話、してたよな。」

デュークは体を日なたへ移動させながら言った。

「そうか、そうだよ、デューク、ぼくもお日さまがぼくらをあたためてくれる、暖かいところへ行こうよ。」

デュークの言葉で、暗がりに向かっていたぼくの世界にも光がさした。

うちのパパは、お客さんに旅を売る仕事をしている。旅というのは、自分の生活しているところからはなれて、どこか遠いと

ころへ行くことのように。パパの会社は家の近くにあり、ぼくはパパのあとをついて行って、パパが働いているところを見ていたことがある。そのとき、パパのところに来ていたお客さんが、太陽のあたる暖かい海辺へ遊びに行きたいと相談していた。そのときパパは、このあたりならまだまだこの時期でも暖かいでしょうと説明していた。ぼくは、このあたりならまだまだ暖かいでしょうという意味がよくわからず、デュークにその話をしたことがあった。デュークの家は、その暖かい海辺の名物を作るレストランだ。だから、デュークは、ここが寒くても、まだ暖かい海辺の場所があることを知っていてぼくに教えてくれた。

「暖かいところに行くって、それはぼくらがこうして歩いて行けるところじゃないよ。」

デュークは体を起こして言った。

「うん、たしかパパはお客さんに、飛行機に乗って、とかそんなことを話していたかな。」

ぼくはパパとお客さんの会話を思い出しながら言った。

「それじゃ、無理だよ。飛行機って、たしか空を飛ぶ乗り物だろ？」

デュークにはまだ光がささないような、かがやきのない話し方で言った。

「無理じゃないよ。パパは言ってたもん。この飛行機はもう満席ですが、ほかに手段はいくらでもあるからあきらめないう探しましょうって。そしてパパはいろいろなところに電話をかけたり、パソコンで何かを調べたりしながら、ようやくなにかを見つけたんだ。そして、お客さん、とても喜んでたんだ。だから、

ぼくからもあきらめないう探そうよ。ぼくパパのところから、暖かいところについて書かれているものを探してくるよ。」

ぼくは言うのと、そのまま急いでパパの会社へ向かった。

翌日、ぼくは二枚の紙をくわえて、いつものようにこの家のうらの芝生にやってきた。今日は先にデュークが日なたのベッドに寝転んでいた。

「やあ、デューク。お待たせ。」

ぼくはデュークの前に二枚の紙を置いて、元気よく話しかけた。

「ああ、ヘルか。ちょうど今あたたまっているところだから、もう少しこのまま寝るよ。」

デュークはぼくに背中を向けて丸くなったまま、もそもそと答えた。

「デューク、暖かいところについて書かれているもの、持ってきたんだよ。ほら、一緒に見てよ。」

ぼくはデュークの背中をなめて起こした。

「なんだヘル、まだそんなこと言ってるのか。ぼくらが暖かいところに行くなんて無理だって昨日言っただろう。」

デュークは相変わらず全然乗り気ではない。ぼくに背中をむけたまま動かない。

「そんなことないよ、ほらデューク見てよ。」

ぼくは持ってきた紙を広げた。

「うわー。これが海か。青くて、広くてきれいだな。」

ぼくが言うと、デュークの耳がぴくぴく動いた。

「うわー。これおいしそうなお魚。」

デュークの耳がまたさっきより大きく動いた。そして今度はしっぽも動いた。ぼくは続けて言った。

「こんなに太陽があたるところでごろごろしたら、気持ちいいだろうな。」

「まあ見るだけなら一緒に見てやってもいいかな。」

デュークも暖かいところへ興味がわいたみたいだけど、相変わらず素直じゃない。

「ほら、これが地図だよ。ぼくたちがいるのがここ。そして、人間はここまで飛行機で行くんだ。でもぼくたちが人間と同じように飛行機に乗るのはまず無理だと思う。だからぼく考えたんだ。」

ぼくはちょっと得意気に言った。

「考えたって？」

デュークはぼくの話に食いついてきた。

「飛行機に乗らずに空を飛んでいけばいいんだよ。」

デュークの顔からかがやきが消えた。

「ああそうだな、ヘル。ぼくらネコも空を飛べたらいいだろうね。まるで鳥のようにね。」

デュークは冷たい声でそう言うと、寂しそうな顔をして、またゆっくり前足に重心をかけて、後ろ足を前にすべらせて寝る姿勢をとった。

「そうなんだよ、デューク。鳥さんは飛行機のように空を飛べる

んだよ。」

「なあ、ヘル。鳥が空を飛ぶってことは、みんなが知っていることだろ。おれたちが暖かいところへいくこととはなんの関係もない話だ。」

デュークはそう言い放つと、目を閉じてすっかり寝る準備に入った。

「それが、関係あるんだよ。ぼくにいい考えがあるんだ。さあデューク起きて。これから鳥さんのところにいくよ。」

ぼくはまたデュークの体をゆすって起こした。

「いい考えって、まさか鳥に飛び方を教わろうなんて言い出すんじゃないだろうな。そんなことは無理だよ。おれたちネコには羽がないんだからな。」

デュークは目を開けて言った。

「ちがうよ。とにかく一緒に行こう。」

ぼくは、今度は寝ているデュークの後ろから頭を押し付けてデュークを無理矢理起こしてから言った。

「さあ行くよ。」

ぼくは町の教会のほうへ向かって歩き出した。デュークは、はじめはぼくが歩くのをただ目で追っていたけど、それからやれやれといった感じで体を起こすと、ぼくの後について歩きはじめた。

教会の前に着くとぼくは立ち止まった。

「このあたりはたしか、コウノトリが巣を作って暮らしているん

じゃないか？」

デュークは言った。

「そのとおり。ねえ、デューク知ってた？コウノトリさんは夏が終わると、仲間みんなで南の暖かいところへ飛び立つんだって。そして冬の間はその暖かいところで過ごして、また冬が終わるとここに戻ってきて屋根や煙突なんかに巣を作って暮らすんだって。」

デュークはうなずいて言った。

「コウノトリは渡り鳥だからな。」

「それにね、コウノトリさんは人間の赤ちゃんを運ぶこともできるんだって。」

「うーん、それは本当かどうかわからない話だけど。」

デュークは小さな声でもそもそ言った。

「だからさ、コウノトリさんにぼくらを南の暖かいところまで運んでもらおうよ。」

「なんだって！」

ぼくが満面の笑顔を作って言うと、デュークがさっきとは反対に大きな声を出した。

「なあヘル、おれたちが突然コウノトリをたずねて、暖かいところへ渡るときに、ぼくも一緒に運んでくださいなんて言って、引き受けてくれると思うのか？」

デュークはぼくのほうにゆっくり顔を近づけながら言った。

「うん、いい考えだと思うけど。どうして？ぼくなにかばかなこと言ってるかな？」

デュークの勢いにおされて、ぼくはなんだか不安になって聞いた。

「これだから、家で飼われているネコは世間知らずだって言われるんだよ。」

デュークは重心を後ろ足に乗せて体勢を整え、前足を右左きちんとそろえて話し始めた。

「いいか、ヘル。世の中には敵がたくさんいるってことを忘れちゃいけないんだ。ぼくらみたいに人間に飼われていると、食べるものにも困らない、寝る場所に困らない、人間はいつもぼくらにやさしく接してくれる。でもノラネコとして暮らしているやつらは、いつも敵に襲われることを気にして、びくびくしながら獲物や寝床を探しまわって、つねにまわりの動物や人間を警戒して生きているんだ。コウノトリみたいに大きなくちばしを持った、からだの大きい生き物に自分たちから近づくなんてことは、とても危険なことなんだよ。あいつらは簡単にぼくらをくちばしで突き刺したりはねとばしたりすることができるんだから。コウノトリに話しかけて、南の暖かいところまで運んでくださいなんてお願いをするなんて、ぼくらみずからけがをしに行くようなものなんだ。いいか、ヘル。でも、もしもそういう敵のほうからぼくらに近づいてきたら、怖がって逃げ出したりしないで、勇敢に戦わなければいけないんだってことも。。。」

「もしかしてあなたたちは、ヘルさんとデュークさんじゃない？」

デュークが熱心にぼくに世の中の恐ろしさについて語っていると、突然後ろからぼくらの名前を呼ぶ声がした。ぼくらが振り

返ると、そこには大きなコウノトリさんがいた。

「うわっ、コ、コウノトリだ！」

デュークはあわててぼくの後ろにかくれた。

さっきぼくに話していたことと、行動が違うじゃないかとぼくは思った。

「あら、おどろかせてしまっておめんなさいね。私の名前はシュウよ。」

シュウさんは、優しい声でぼくらに話しかけてくれた。

「どうして私があなたたちの名前を知っているんだろうって不思議に思ったわよね、フフフ。」

シュウさんはやさしくほほえんで言った。

「あなたたち、この間このあたりで遊んでいるときに、鳥のたまごをみつけてくれたことがあったでしょ。」

そういえば、ぼくとデュークが教会のうらで追いかけてっこをして遊んでいるときに、大きな木の下で葉っぱに埋もれているたまごをみつけたことがあった。ぼくらはすぐに、そのたまごがなんだかととても大切なものだと思感じた。きっとお父さんとお母さんが必死にたまごを探しまわっているんじゃないかと思い、ぼくとデュークはたまごがみつきやすいように、そおっとたまごを葉っぱの下から出して、教会の入り口のあたりまで運んだ。そして、冷えないように芝生でベッドをつくってそこにのせた。翌日ぼくらがたまごの様子を見に行くと、芝生の上からたまごがなくなっていた。ぼくらは、きっとたまごはお父さん、お母さんのところに無事に戻ったんだろうと思い、またそこで

追いかけてっこをして遊び、お昼寝をして家に戻った。シュウさんは、二匹のネコがたまごをみつけて、教会の入り口にそっと置いていたことをたまたま見ていたというコウノトリの仲間から話を聞いて、無事にそのシュウさんのたまごを取り戻すことができたのだそうだ。

「あのとき、私たちの巣からたまごがなくなっていたから、主人とふたりで必死になって探していたのよ。ほかの鳥にさらわれてしまったんじゃないかと思うと、とても悲しくてこわくて。でもあなたたちのおかげでたまごをみつけることができて、今ではひなもかえって、日々元気に成長しているのよ。」

シュウさんが幸せそうに話しているのを見て、いつのまにかデュークもぼくの後ろから姿をあらわしていた。

「たまごをみつけた翌日、あの場所にあなたたちがやってきたのを見ていたの。たまごが置かれていた場所を確認すると、安心した様子でお互いにヘル、デュークって呼び合って仲良く遊んでいたわ。そのときはちょうどたまごが孵化する前だったからあわてていて、あなたたちに声をかける時間がなかったのだけれど、いつかお礼が言いたいと思っていたの。そうしたら、今日またふたりにそろってここで会うことができたわ。本当にあのときはありがとう。心からお礼を言うわ。」

シュウさんはぼくらの前で頭を下げた。

「ところで、さっきは何を熱心に語り合っていたの？」

ぼくはシュウさんに、ぼくらが人間のように暖かいところへ行きたいと思っていること、そしてコウノトリさんにそこまで運んでもらえないかと思ってここまで来たことを話した。「でも、

デュークに、コウノトリさんは恐ろしい敵だから、そんなことをたのめるわけがないって言われていたんです。」

ぼくが言うと、デュークはあわてて言った。

「いやその、恐ろしい敵だなんて、ぼくは別にコウノトリが恐ろしいって言ったわけではなくて、世の中には恐ろしい敵がたくさんいるから、つねに警戒しないとだめだよってヘルに話をしただけじゃないか。」

ぼくらの話を聞いて、シュウさんは笑った。

「暖かいところに行きたいなんて、あなたたちは本当に面白いことを考えるのね。いいわよ、私たちが喜んであなたたちを暖かいところまでお届けするわ。私たちコウノトリは、ここからはるか遠くまで旅をするけれど、途中立ち寄る島には、人間もたくさん旅行に来ていて、ネコさんもいっぱいいるのよ。太陽が差し込む暖かい海辺のリゾート地なの。そこでいいかしら？」

シュウさんは笑顔でぼくらに聞いた。

「もちろんです。ありがとうございます。」

デュークとぼくは声をそろえて答えた。その島に一週間くらい滞在したら、こんどはその島をかってぼくらの町を通過するグループの鳥さんに、ぼくらをまたここまで運んでもらえるようにたのんでくれることになった。

こうしてぼくらは南の暖かい島をめざすこととなった。

2

南の島に到着



翌日から急に寒くなるという天気予報が流れた日、ぼくらはコウノトリさんと一緒に南の島へ向かった。デュークとぼくの家の人たちに、ぼくらが南の島へ行ってくことを伝えるために、パパの会社にあった南の島への旅行参加申込書に、ぼくとデュークの足あとでサインをして机の上に置いてきたけれど、気づいてくれるかな。

デュークとぼくは、シュウさんが用意してくれた大きな袋のなかに入り、それをシュウさんとシュウさんのご主人が口にくわえて南の島まで運んでくれた。空を飛んだのは生まれて初めてのことで、とてもわくわくした。空から地上を見ると、大きかった教会もすぐに豆粒みたいに小さくなり、見えなくなった。デュークは下を見ると怖くなるなんて言って、ずっと袋の中で丸くなっていた。

「さあ着いたわよ。」

シュウさんたちは、ぼくらを地上におろして言った。飛行時間は思っていたよりも長かった。袋の中から外に出ると、もうお日さまが沈みかけていた。そして、そこはいつもとはまったくちがう空気のおいがした。

「うわー、ついに南の島にやってきたんだ！シュウさんたち、本当にありがとうございました。」

ぼくたちはシュウさんたちにお礼を言った。

「どういたしまして。あなたたちに喜んでもらえて、私たちもうれしいわ。そうそう、私たちはあなたたちの恐ろしい敵ではないけれど、デュークさんの言うとおりに、世の中には怖い敵がいっぱいいるから、くれぐれも気をつけて過ごすのよ。」

シュウさんはお母さんのようにやさしく忠告してくれた。そして仲間たちの集まる場所へ飛んで行った。

「ぼくたち本当に南の島に来たんだね。やっぱりここはまだまだ暖かいね。」

ぼくは思いきりのびをしてから言った。

「ああ、暖かい。でも、ヘル、なんだかとっても疲れたよ。まずはどこかで眠りたいな。」

デュークは眠そうな目をむけて言った。デュークの言うとおりに、ぼくらは慣れない長い空の旅をしたあとで、とても疲れていた。

「うん、そうだね、デューク。もうすぐ日も暮れそうだし、とりあえずどこかゆっくり眠れる場所を探そう。」

ぼくらは歩き出そうとしたけれど、どちらに向かって進めばいいのかまったくわからなかった。

「ここはいったいどこなんだろう。どこに行けば何があるのか、さっぱりわからないよ。」

デュークの声はなんだか不安そうだった。

「よし、あっちへ行ってみよう。」

正直なところ、ぼくも自分がいるところがどこなのか見当がつかなくて、ちょっと怖い気持ちになったけれど、ぼくがデュークを誘ったんだし、ぼくがデュークの前で不安な声を出してはいけないと思い、わざと元気な声を出した。

ぼくらはだまったまましばらく歩き続けた。

そのうちあたりも暗くなってきた。どこに行けば何があるのかまったく予想ができないこの見知らぬ土地で、ぼくの、きっとデュークの不安もとても大きくなっていった。少し先に、大きな木がしげり、そのまわりにも小さな木々が立っているところが目に入った。

「ねえ、デューク、ひとまずあそこの木の下で休もうか。」

「そうだな。」

デュークはそれだけ言うと、木の下まで歩いて行き、眠りやすそうな場所をみつけるとすぐに横になって頭をおなかのほうに近づけて丸くなり、目をとじた。きっととても疲れていたんだ。ぼくももうくたくただ。まずは眠りたい。ぼくもデュークのとなりで横になって丸くなった。

明るい太陽の光を感じて目がさめた。なんだか暖かい空気を感じる。木々の葉っぱのかおりが気持ちいい。そうだ、ぼくたちはシュウさんたちに南の島まで連れてきてもらったんだ。となりではまだデュークが寝ている。昨日の慣れない移動でとても疲れていたようだから、もう少しこのまま眠らせてあげよう。ぼくは前足で顔を洗ってから、足を前と後ろ出して体をのばした。ぼくは通りのほうへ歩いて行った。朝陽があたっていると、あたりの様子が昨日よりもよくわかる。シュウさんたちと別れてからぼくらが歩いてきた道の先は、どうやら広場のようになっているようだ。この夏のかおりにつつまれていると、昨日恐怖を感じていたことなんかすっかり忘れてしまった。ぼくがきよるきよるしていると、デュークも起きてぼくのところまでやってきた。

「ヘル、おはよう。ここはまだ夏なんだな。」

デュークもうれしそうだった。

「おはよう、デューク。ねえ、あっちを見て。あそこなんか広場になっているみたいだね。あそこまで行ってみない？」

「うん。あそこまで行けば何か食べるものを手に入れることができるかもしれないな。」

ぼくらはまた歩き始めた。

ぼくが思ったとおり、そこは広場になっていて、人間が乗るバスも何台か停まっていた。

「きっと、南の島へ遊びにきた人間たちが乗っているバスなんじゃないかな。」

デュークが想像したように、そのバスからはすがすがしい顔をした人間たちが次々と降りてきて、旗を持った人のところにみんな集まった。それから、その旗を持った人は、みんなの先頭にたって歩き始めた。人間たちが歩いているのは、大きな石造りの橋の上だった。その橋の先は、大きなお城の入り口のようにになっていた。人間たちは少し行くと、その橋の手すりから下をみてはしゃぎはじめた。ぼくとデュークは顔を見合わせると、何も言わずに、ただ引き寄せられるように人間たちのあとを追って行った。手すりについている窓のような穴に前足をのせて、顔を出して下をのぞいて見た。

「うわっ、海だ！」

ぼくは叫んだ。

「ああ、おれたちは海の上にいるんだ！」

デュークも大きな声で答えた。

生まれてはじめて見る海は、パパのところから持ってきた紙に載っていた写真のように、ずっと遠くまで広がっていて、水が青く透き通っている。太陽の光が水面に反射し、ところどころ白く輝いていてまぶしい。ぼくとデュークはそのまましばらく動けなかった。

「海って。」

デュークは遠くをみつめたまま先の言葉を考えていた。

「広いな。」

ふと気がつく、さっきの人間たちはもうそこにはいなかった。

「みんなあの先の立派な門をくぐっていったのかな？」

「うん、きっとそうだろう。おれたちも行ってみよう。」

ぼくたちは橋の上をふたたび歩き始め、つきあたりにある石造りの塔についている門をくぐっていった。すると、近くに噴水があり、またその先に道が広がっていた。ぼくたちは何も言わずに噴水に向かい、しばらくだまって水を飲んだ。突然、デュークがぼくをおいて走りはじめ、左へ曲がった。

「デューク。どうしたの？」

ぼくも走ってデュークを追いかけて、左側へ曲がった。そこは細い道と階段が続いていた。デュークはうれしそうに階段を駆け上って行く。ぼくもとてもわくわくして階段を上って行った。

「デューク待ってよ。」

「ヘル、こっちだよ。」

デュークは言う、今度は右に曲がった。ぼくがデュークが曲がったところまで到着する直前に、デュークがふいにぼくの前に出てきて頭を前足でパンチした。

「やったなー。」

そして今度はぼくが先に走り始めて、先回りして左の路地にかくれ、デュークが通り過ぎたあとを後ろからおそった。この細い階段や路地が広がる場所は、ぼくらがかくれんぼをするのにまったく都合がよかった。いつも遊びなれた場所とは違って、新しい隠れ場所を使って、今度はどうやってデュークを驚かそうかと次々に楽しいことが浮かんできた。ぼくらはしばらくの間、この迷路のような路地を使って、いつもよりもはしゃいで遊んだ。

「ねえ、デューク。ぼくお腹すいたよ。」

「そうだな。何か食べるものを探そう。」

ぼくとデュークは階段を降りて、おおきな通りへ出た。いつもはお腹がすくと、おうちに帰ってママが用意してくれたご飯を食べているから、外で、この見知らぬ土地で、何か食べるものを探すなんて、ぼくたちには簡単なことではなかった。ぼくらは歩くうちに、また不安を感じてだまりこんでしまった。そのとき路地からネコが出てきてぼくたちの前を歩き始めた。

「デューク、あのネコに、どこかで何か食べられるところがないか聞いてみようよ。」

ぼくが走りはじめようとする、デュークが急いでぼくをとめた。

「ヘル、だめだ。」

デュークは怖い顔をしてぼくを見た。

「どうして？」

「この間話したこと、忘れたのか？世の中には敵がたくさんいるってこと。」

デュークは続けた。

「あのネコはぼくらよりやせている。このあたりのこともよく知っているみたいだ。きっとノラネコだ。ということは、毎日自分で食べ物をみつけてなんとか生活しているんだ。そんなやつが、おれたちのような新参者に、食べ物のありかを簡単に教えてくれるわけがない。」

ぼくはもう一度前のネコを見た。たしかにデュークの言う通り、体つきはやせていて、このあたりのことはよく知っている様子で、ぼくらのようにまわりをきよるきよるせずにまっすぐどこかに向かって進んでいた。

「こういうときは、やつにみつからないようにそっとあとをつけるんだ。きっとどこかで何かを食べるはずだ。」

デュークは言った。

「そうか、そこにぼくたちも行っ、食べものをわけてもらうことができるってことだね。デューク、頭いいね。」

「ちがうよ。やつが食べているところにおれたちが行って目の前で邪魔なんかしたら、食べものを横取りしに来たやつらを倒そうとして、一気に爪をたてておそいかかってくるに決まっているだろ。」

ぼくは想像して身震いをした。

「じゃあどうするの？」

「まずは、やつがどうやって食べものをみつけるのかを観察するんだ。そして、やつが食べ終わってどこかへ行ったあと、おれらもそのあたりにいって、同じように何か食べるものがないか探すんだ。」

デュークは落ち着いた声で言った。

「わかった、デュークの言う通りにするよ。」

ぼくたちは前のネコに気づかれぬようにそっと後ろをつけていった。すると、ネコはレストランの前でとまった。そこでは、人間たちがテラスのテーブルで楽しそうに食事をしていた。とてもいいにおいがした。ぼくはじっとしていられなくて、走り出したい気持ちになったけれど、デュークがそんなぼくに気づいて、ぼくの前に体をのりだしてとめた。

「デューク、わかったよ。」

ぼくはおとなしくじっとして、ネコの様子をじっと見つめた。ネコは後ろ足に重心を置いて、人間たちのようすを鋭い視線で眺めていた。食事を終えた人間たちのテーブルから、レストランの店員が食べ終わったお皿をさげた。すると、ネコはその店員を小走りで追いかけてレストランのうら手に回った。ぼくたちもそとうらのほうへ行くと、ネコは店員が捨てた、人間の食べ残しや魚の骨をゴミ箱からあさって食べていた。ひととおり食べ終わると、ネコは口のまわりを前足でふいて、前足をなめまわすと、またどこかへ歩いて行った。

「デューク、すごいよ。あそこにいればぼくたちも食べものを口にすることができるね。」

「ヘル、あそこで待っていたらだめなんだ。」

デュークはまだきびしい顔つきで言った。

「あそこで待っていて、店員の人間にみつかったら、そのときはその人間に追い払われるかもしれないだろ。」

「そうなの？」

「人間の中には、ネコに親切な人たちもいて、人間たちのほうからぼくたちネコに近づいて食べ物を与える人もいるけど、ネコが嫌いな人は、とことんネコに意地悪をするんだ。だからまず、その人間が敵か味方なのか見分けることが大切だ。」

デュークはそう言うと、またテラスのほうへ歩いて行った。ぼくらはさっきのネコのようにじっと動かずに様子をうかがい、テーブルからお皿をさげる店員をみつけると、少しあとから小走りでさっきの場所へ向かった。その店員がお皿の中のものをゴミ箱へ捨てると、ぼくたちは人間がいなくなるのを待って、ゴミ箱に近づいた。ゴミ箱の中には、人間が食べきれなかった魚が半分と、魚の骨、それからポテトが捨ててあった。ぼくとデュークは大喜びでそれらを分け合って食べた。ぼくたちがうっかり警戒心を忘れて食べ物に夢中になっていると、後ろでさっきの店員がぼくたちの様子を見ていた。デュークはとっさに耳を寝かせて体中の毛を逆立たせてうなり声をあげた。

「やあ、ねこちゃんたち、驚かないでいいんだよ。ぼくはきみたちの味方だ。ほら、ここにも魚があるから食べな。」

その店員はそう言うと、ぼくたちにまた別の魚の残りをくれた。デュークはそれでも警戒していたけれど、ぼくはまたおいしそうなおいにおいに負けて、その魚に口をつけた。そっと上目づかいで人間の様子をうかがうと、彼はにこにこしてぼくを見ていた。どうやらこの人間は本当に味方なんだ。少しすると、デュークも彼が味方であることを認め、ぼくのところにきて一緒に魚を食べた。魚はとってもおいしかった。ぼくたちは食べ終わるとそこを離れ、日なたで毛づくろいをはじめた。

「やっぱり海の近くの魚は味が違うね。ほんとうにおいしかったよ。」

ぼくは南の島にやってきてよかった、と心から思った。

「おいしい食べものが手に入るところもみつかったし、ひと安心だね。」

「ヘル、これからもずっとあそこでまたおいしいものが食べられるとは限らないよ。」

デュークがまたぼくの楽しい気持ちをこわすようなことを言った。

「もうデュークはまたそんな先の暗いことばかり言って。世の中には敵がいるから警戒しなければいけない、って言いたいんですよ。でもコウノトリさんだって、レストランの人間だって、みんなぼくたちに優しくなかったじゃないか。デュークは心配しすぎなんだよ。せっかくこんな遠くの海辺までやってきたんだから、もっと楽しいことを考えようよ。さて、今度はあっちに行ってみよう。」

ぼくはもうデュークの警告を耳にしたくなくてひとりで歩き

始めた。すると突然、ぼくの前に、体が大きく、でもやせているこげ茶色のネコが現れた。

「おまえら、みかけない顔だな。」

こげ茶色のネコは、ゆっくりぼくに近づいて言った。

「あそこのレストランで、誰の許可をもらって魚を食ったんだ？」

こげ茶色のネコは、ぼくを囲うようにゆっくりとぼくのまわりを歩きはじめた。

「誰の許可って、ぼくが食べたい魚を食べるのに許可をもらう必要なんかないよ。」

ぼくはおそるおそる答えた。

「なんだと？あそこは俺様が許したやつしか入れないところだ。そんなことも知らないなんて、おまえらはよそ者だな。」

「でも、レストランの人間はぼくたちに魚をくれたんだ。それに、ぼくたちの前にも、別のネコがあそこでゴミ箱から魚をあさって食べてたじゃないか。」

ぼくはなるべくゆっくり体をこの大きなネコから遠ざけながら、でも負けたくない気持ちもあって言った。

「おまえ、この俺様に刃向かうつもりか？二度とあそこには行かないと言うなら、今日のところは許してやってもいいんだぞ。」

ぼくはすごく怖かったけど、あそこでもうあのおいしい魚を食べられないなんて嫌だった。それに、今日のぼくはいつものぼくとは違っていた。頭の中には広くて青い海が、そしてデューク

と走り回った階段や路地が浮かび、なぜだかぼくは自分が強くなった気がしていた。

「ぼく。。。」

言いかけると大きなネコはさらに顔をぼくに近づけてきた。

「ぼく、またあそこで魚食べるよ。」

ぼくが答えると、こげ茶色のネコは突然うなり声をあげてぼくの頭に爪を立てておそいかかってきた。頭に痛みが走った瞬間、茶色のネコがギャッとさけび声をあげてぼくから手をはなした。デュークが後ろからしっぽに噛みついたようだった。

「ヘル、今だ、逃げるんだ。」

そう言うと、ぼくらは何も考えずにひたすら全速力で駆け出した。

気がつくと、ぼくたちは木の葉で太陽の光がさえぎられた日陰にきていた。ずいぶん長い距離を走ってきたみたいだ。さっきのネコはおいかけてきていないようだった。

「デューク、ありがとう。」

ぼくは隣で毛づくろいをしているデュークに言った。

「デュークの言うとおりであった。世の中には怖い敵がいっぱいいるから、つねに警戒しなくちゃいけないんだね。」

「そう、おれの言うとおりであったな。」

デュークは毛づくろいをやめずに、おなかをなめながら続けた。

「もしも敵のほうからおれらに近づいてきたら、逃げ出したり

しないで勇敢に戦ったな、ヘルは。」

デュークは今度は前足をなめながら、やっとぼくのほうを見た。

「うん。」

ぼくは元気よく答えた。

3

海を渡る



ぼくたちはまた階段をみつけた。今度の階段はずいぶん長く、高いところまで続いているみたいだ。デュークを見ると、だまってうなずいた。行こうという合図だ。ぼくらは階段を上りはじめた。ぼくたちの前に、人間たちがゆっくり階段を上っているのが見えた。ぼくたちは一瞬立ち止まったけれど、その人間たちは息を切らしながら階段を上がるのに必死な様子だったから、デュークとぼくはそっと彼らの横を通り過ぎた。

上までたどりつくと、今度は細い道が広がっていた。両側は低い壁に囲まれている、橋のような道だった。ぼくらは道を進んで行った。

「海のかおりだ。」

デュークが立ち止まって言った。ぼくも立ち止まって空気のおいをかいでみた。

「うん、これは海のかおりだ。」

もう少し先まで行けば、海があるのかもしれない、ぼくたちはそう思ってそのまままっすぐ道を進んだ。でもぼくたちの前には海は見えてこなかった。かわりに、丸くなった少し広い広場のようなところに出た。そこから人間たちが壁に手をかけて外を見ていた。きっとこの壁の外側には海があるにちがいない。

「海が見たいな。」

デュークは言った。

「でも、この壁には窓がない。壁にのぼらないと海を見ることはできないよ。」

ぼくはなんとか壁の上へのぼれないかと、前足を壁にそっては

わせて背伸びをしてみたけど、壁は高くてのぼれそうもない。あっちの壁はどうだろう。海が見えるような穴があいてないかな。それとも壁にあがれないかな、ぼくは落ち着かなくてあっちに行ったり、こっちに戻ったりしていた。なんだかここなら飛び上がれるかもしれないと思って、ジャンプの体勢をとったとき、デュークが言った。

「おいヘル、ここで壁の上にジャンプして、もし壁がうすくて着地に失敗したらどうするんだ。そのまま海の中に落っこちるかもしれないぞ。残念だけどここじゃだめだよ、もう少し先に行ってみよう。」

広場の左側から、またさっきと同じように細い道が広がっていた。ぼくもあきらめて、また細い道を歩くことにした。相変わらず海のかおりが漂っている。しばらく行くと、また丸くなった広場があった。ここでも人間は壁の外を見ている。

「ここも同じか。」

デュークが残念そうに言った。ぼくはきよるきよると様子をうかがった。

「ねえデューク、あの人を見て。」

男の人が壁の上に手をのぼして気持ち良さそうに海を見ていた。

「あの子の顔、パパがぼくをおなかにのせてソファでリラックスしているときの表情と同じだ。それに腕を壁の上でのぼしている。ということは、あそこの壁は、人間の男の人が安心して手をのぼせるほどの暑さがあるんじゃないかな。」

「うん、たしかにそうだな。」

デュークも同意した。

「ヘル、あそこの壁なら少し低くなっているからあそこに上ってみようか。」

「うん、そうしよう。」

ぼくたちは壁のところまで歩いて行った。まずぼくが少しかがんで勢いをつけて、思い切って壁の上に向かってジャンプした。無事に着地成功。それから今度はデュークが壁まで上がってきた。壁の外側には、思った通り、青くて広い海が広がっていた。ぼくは慎重に海の方へ体勢をととのえた。デュークも海を見ているけど、重心がお尻によっていて姿勢が低くなっている。

「ねえデューク、海の上で動いているの、あれは何？」

「船だよ。船は飛行機が人間を乗せて空を移動するように、人間が水の上を移動するときの乗り物だよ。」

デュークは教えてくれた。

「海の上を移動するって、どんな気持ちなんだろう。」

「さあな。風が海の潮のかおりを運んできてくれて、すごく気持ちいいかもしれないけど、すごく揺れるのかもしれないな。」

そのとき、小さな船がぼくらの向かいにある島へ向かって行くのが見えた。ぼくはじっとその船を見ていた。その船が向かいの島に到着すると、人間たちが船から島へ降り立った。そして今度は島から別の人間たちが船に乗って、船はまた今通った海を引き返して行った。

「よし、デューク。ぼくたちも船に乗って海を渡ろう。」

ぼくは笑顔で言った。

「ヘル、またそんなこと言い出して。」

デュークはあきれ果てた顔でぼくを見た。

「船に乗って、別の島へ行ってみようよ。飛行機はどういうものなのか見たこともなかったし、人間と一緒に乗るのは無理かなと思ったけど、船ならこっそり乗り込んでしまえばきっと大丈夫だよ。」

「おいおい、そんな簡単に言うなよ。まずどこから船に乗るんだよ。」

デュークはまたぼくの話に乗り気じゃない。

「ここからいろんな船を見ることができるんだから、きつこのあたりのどこかに船に乗り込める場所があるはずだよ。探してみようよ。」

ぼくはすっかり楽しくなって、壁の上をすたすた歩いた。ふと道をはさんだ向かい側の壁の上が気になった。ぼくは慎重に前足を壁にはわせてからジャンプして壁から下へ降りると、今度は向かい側の壁にのぼれそうな場所を探した。少し行くと低い壁がみつきり、簡単に壁の上のぼることができた。デュークもだまってぼくの後からついてきた。

「あ、船がいっぱい停まっている。」

「あそこは港なんだな。」

デュークが言った。港とは、人間が船の乗り降りをする駅みたいなところだとデュークが教えてくれた。

「デューク、あそこへ行って船に乗ろうよ。」

はじめはぼくの提案に面倒くさそうにしていたデュークも、港をみつけるとわくわくしてきたようで、だまってうなずいた。

ぼくたちは階段を降りて港にやってきた。

人間が数人しか乗れないような小さな船から、二階建ての大きな船までたくさんの船があった。

「乗るならあれくらいの大きな船にしたほうがいいな。出発する前に人間にみつかって追い出されてしまったら何もはじまらないからな。」

デュークが言った。すると、ちょうど二階建ての大きな船が港に入ってきた。船が停まると、人間たちが降りてきた。

「デューク、あの船に乗ろうよ。」

「ああ、ちょうどいい大きさだし、見かけもとてもかっこいい。」

デュークはぼくよりも乗り気になっていた。ぼくたちは船から降りた人たちの雑踏にまぎれて、船に向かって走った。今度は待っていた人たちが船に乗り始めた。ぼくたちは最後の人が船に乗るのを物かげに身をひそめて見届けると、急いであとをおいかけて船に乗り込むことに成功した。

「ひとまずあそこにかくれよう。」

ぼくたちは人間が座るいすが置かれていない船の前の方に身をかくした。少しすると、船から港へかけられていた板のようなものがはずされ、船が動き出した。

「ヘル、いよいよ海を渡るんだ。」

デュークははじめの面倒くさそうな態度とは一転して、とても楽しそうだった。船はゆっくり方向転換すると、まっすぐ進み始めた。窓から外を見ると、目の前にはただただ青い海が遠くまで広がっていた。

「あの階段で上まで行ってみようよ。外の空気にふれて、とても気持ち良さそうだよ。」

ぼくが言うと、デュークもぼくを戒めることなくうれしそうに同意した。階段を上ると外に出た。何人かの人間たちが海のほうを向いて潮風にあたっていた。ぼくたちは彼らに気づかれないように後ろをそっと走って船の後ろまできた。

「なんて気持ちいいんだろう。」

ぼくたちは太陽の光で明るくかがやいている場所へ行き、足をくずして横になった。お日さまがぼくらを毛の奥まで暖めてパワーをそそいでくれているところに、ちょうどすがすがしい風が海のかおりを運んでくれて、それはもうとても幸せな気持ちだ。

「よう、さっきはよくもやってくれたな。」

ぼくらがすっかり油断していると、突然後ろから聞き覚えのある声がした。さっきのこげ茶色の大きなネコがのそりと近づいてきていた。デュークとぼくはびくっと立ち上がり、せいっぱい毛を逆なでさせた。

「天気の良い午後のクルーズは最高だな。」

こげ茶色のネコはニヤニヤしながらぼくたちのすぐ近くまで顔を近づけてきた。

「そうだよ、とても気持ちがいいよ、船の上は。」

ぼくもまた、笑顔を作って答えた。

「しかし残念だなあ。おまえらの楽しいひとときもこれまでだな。」

デュークとぼくはどんどん後ずさりをしていたけれど、ついに船の一番後ろの壁にぶつかってしまった。もう後がない。そのとき、こげ茶色のネコが足をあげて飛びかかってきた。

「ヘル、こっちだ。」

デュークがものすごいすばやさでネコパンチをかわし、船のはしに置かれていた荷物に飛び乗った。すると今度はこげ茶色のネコはぼくのほうへ向きを変えておそいかかろうとした。ぼくにはもう逃げ場がなかった。もうだめだ、と思った瞬間、こげ茶色のネコは、後ろをかみつこうとしていたデュークの方へ向きをかえ、前足を思いきり振り下ろした。デュークはとっさに船のへりへジャンプした。が、勢いあまってそのまま海へ落ちてしまった。

「デューク！」

「はっ、ばかなやつだな。仲間を助けようとして自分が海に落ちるなんて。まあ、この俺様に刃向かった罰があたったんだな。」

ぼくはからだ中から怒りがわき起こった。ただただ、目の前の敵が許せなかった。

「さて、おまえはどうする？このまま俺様と一緒にクルーズを楽しんで、今後俺様の言うことをおとなしくきく素直なネコになるか？」

こげ茶色のネコは相変わらずニヤニヤしながらぼくに言った。

「そうだな、それもいいかもね。せっかくこうして船に乗り込んだんだからこのまま気持ちよく乗っていたいね。」

「なんだおまえ、なかなかかしこいじゃないか。」

こげ茶色のネコはぼくから少し身を引いた。

「きみならおいしいものを食べられるところをたくさん知ってそうだし、ぼくは少しわけてもらえればそれで十分だからね。」

こげ茶色のネコはぼくのことばにすっかり気を許して、前足をなめはじめた。ぼくは笑顔でこの大きなネコに近づいて行った。

「なんて、ぼくが言うとても思ったか！」

ぼくはありったけの力をこめてこげ茶色のネコにパンチをし、そのままデュークのあとを追って海に飛びこんだ。

4

新しい友達



「まったく不思議な日ね。」

「ネコが二匹も船から海に飛びこんでくるなんて。」

ぼくは気がつくやうに、何かの上で揺られながら海の上にいる。

「ぼくはいったいどこにいるの？」

ぼくは声を出して弱々しく言ってみた。

「あら、こっこのネコさん、気がついたみたいね。」

ぼくはだれかの背中の上にいるみたいだ。

「あなたはだれ？」

「私はイルカのクロナよ。」

ぼくがたずねると、クロナさんはぼくのほうにちらっと顔を向けて答えた。

「そして、私はカトル。」

声がかかるほうを見ると、もう一頭イルカさんが隣を泳いでいた。そしてそのカトルさんの背中の上で、デュークが眠っていた。

「デューク！」

ぼくは何が起こったのか思い出した。船の上でこげ茶色のネコと遭遇し、追いつめられたぼくたちは船の一番後ろで逃げ場を失い、デュークがぼくを助けようとして船から落ち、そのあとを追ってぼくが海に飛びこんだのだ。

「あの、あなたたちはぼくたちを助けてくれたんですね。」

ぼくは言った。

「私たちがいつものように海を気持ちよく泳いでいたら、とつぜん何かが海に飛び込んで来て、近寄ってみたらこちらのネコさん

が沈んでいくからあわててもぐって追いかけたのよ。」

カトルさんが言った。

「そして、カトルが海中から出てくると、今度はあなたが船から海に向かって飛び込んで来て、またまた沈んでいくところだったから私かもぐって救い上げたの。」

今度はクロナさんが言った。

「とにかく、あそこの島まで行くから、しっかりつかまってね。」

クロナさんはそう言うと、尾びれを揺らしてスピードをあげた。ぼくは振り落とされそうになり、あわててクロナさんの背中にしがみついた。まもなくぼくたちは島に到達し、ぼくはクロナさんの背中からゆっくりと陸に降りた。

「クロナさん、本当にありがとうございました。」

「もう一匹のお友達ももうすぐ着くわ。でもあなたたちなんで海に飛びこんだりしたの？ネコさんは泳ぎが得意ではないでしょう？」

「船の上で意地悪なネコに会って、追いつめられて船から落ちたんです。」

ぼくは正直に答えた。

「あら、大変だったのね。それにしても、船に乗るなんて面白いネコさんたちね。とにかく無事でよかったわ。」

クロナさんが言うと、カトルさんがデュークをのせて到着した。ぼくはカトルさんの背中からデュークをおろした。

「カトルさんも本当にありがとうございました。」

「どういたしまして。私たちイルカは、誰かが元気になってくれる助けができることがうれしいのよ。」

カトルさんは言った。

「さて、私たちは行くけれど、あなたたちはこれからどうする？」

「デュークが元気になるまでここでゆっくり休みます。でも、また向かいの島に帰らなければいけないんです。」

「そう。それじゃまた三日後に迎えにくるわね。」

「本当ですか。そうしていただけるととても助かります。ありがとうございます。」

ぼくがクロナさんとカトルさんにお礼を言うと、二頭はまた海へと戻って行った。それからぼくはデュークを一生懸命なめて起こした。

「デューク、ねえ、しっかりしてよ。」

デュークは耳をピクピク動かして、ようやくうすく目を開けた。

「デューク、ぼくが誰だかわかるよね。」

デュークはまばたきをしてもう一度ぼくを見た。

「ヘル。」

「そうだよ、ヘルだよ。」

デュークは足のうらを地面につけると、地面をけるように思いきり力をこめて背中を丸め、大きくのびをした。

「やれやれ。いったいここはどこなんだ？」

デュークはいつもと変わらない声で言った。

「デューク、ぼくたちが船に乗ったのは覚えてる？」

「そうだ。おれたちは船に乗ったんだ。二階に上がって外で太陽の光をあびて横になっていたんだ。」

「うん。そしたら？」

「そうそう、あの大きな意地悪なネコが現れて、それで。」

「それで？」

「それで、どうしたんだ？」

デュークはその後のことを覚えていなかった。ぼくがその先を説明すると、デュークはおどろいて目を大きく開いてぼくを見た。

「それで、イルカがおれたちをここまで運んでくれたっていうのか？」

「そうだよ。そして、三日後にまたむかえにきてくれるって。」

ぼくが言うと、デュークはまた疑わしい顔をした。

「本当なんだよ。そうじゃなければぼくたちこうして生きていないだよ。ほら、まだデュークのおなか、ぬれてるでしょ。」

デュークは自分のおなかがぬれているとわかると、何も答えずおなかをなめはじめた。ぼくも一緒になって毛づくろいをはじめた。

ふと何か視線を感じて顔をあげると、子ネコがぼくたちを見ていた。

「ミャア。」

ぼくと目が合うと、子ネコはかわいい声で鳴いた。

「こら、ちび助。また勝手にこんなところまで来て。」

子ネコをおいかけて、後ろから三毛猫がやってきた。

「おや、新しいお友達かい？」

三毛猫は子ネコに言うと、ぼくたちのほうを見た。デュークとぼくはとっさに身構えた。そんなぼくたちを見ると、三毛猫は警戒したような、でもどこか残念そうな顔をした。

「おともだち。」

そう言うと、子ネコは無邪気にデュークに近寄って顔の下にもぐった。子ネコがデュークのおなかに頭をすりつけると、緊張していたデュークのからだはすっかりほぐれて、やさしく子ネコをなめはじめた。ぼくは何が起きているのか、どうしたらいいのかわからなかった。今日初めて会ったネコに意地悪をされて海に飛びこんだのはついさっきのことだ。そしてまた目の前に見知らぬネコがいる。こんなときデュークはいつも、気をつけるって言っていたのに、子ネコに甘えられてすっかり喜んでいる。ぼくは三毛猫の方を見た。

なんだか今度はこのネコたちと友達なれそうな気がするなあ。ぼくがそう思っていると、三毛猫がぼくのほうに近づいてきた。

「ちび助はきみたちが気に入ったみたいだ。」

「や、やあ。」

ぼくはちょっと緊張しながら声をかけた。

「きみたちはこの島のネコじゃないね？」

三毛猫は優しい声で、まるで友達のようにぼくに言った。

「うん。ぼくたちは海を渡って、さっきここに到着したばかりなんだ。」

「えっ、海を渡ったの？きみたち面白いね。」

三毛猫は言うのと、ぼくに鼻を近づけてきた。ぼくもそのまま三毛猫の鼻に鼻をつけてぼくたちは体をすり寄せ合ってすっかり友達になった。すると今度はちび助がぼくのおなかの下に入ってきて、ぼくがちび助をなめている間に、デュークと三毛猫のブロが仲良くなっていた。ぼくらが浜辺でじゃれあって遊んでいると、港のほうから船のエンジンの音が聞こえてきた。

「あ、帰ってきたみたいだ。ヘル、デューク行くよ。」

「行くってどこに？」

ぼくが聞いたときには、ブロはもうちび助と一緒にしっぽをピンと立てて走り出していた。デュークとぼくもブロたちのあとを追うことにした。

港につくと、ほかにもネコたちが集まって船が到着するのを待っていた。ぼくたちがそこに近づいても、ぼくたちにいやな顔を向けるネコたちはいなかった。小さな船が到着すると、おじさんとおばさんがバケツに手を入れて、何かを投げた。これは、魚のにおいだ。魚が投げられるとすぐにネコたちがそこに集まった。デュークもぼくもとてもお腹がすいていた。ぼくたちも魚の方へ近づいたけど、その魚は真っ黒のネコがさっとくわえてうしろのほうへ歩いて行ってしまった。あーあ、とがっかりしたのはほんの一瞬で、船の上のおばさんはまたバケツから魚を出してぼくらのほうに向かって投げた。今度はブロがそれをくわえてちび助と一緒にうしろに下がった。こうして次々に魚が投げられ、ネコたちはみんなちゃんと魚を口にすることができた。そして船のおばさんはぼくたちをみつけると言

った。

「あら、あなたたち初めて見るネコね。お腹すいているかしら？」

そしてバケツから魚を二匹取り出し、デュークとぼくの前に投げた。ぼくたちはすぐに魚にかみついた。丸ごとの魚をかじるなんて、ぼくにははじめてのことだった。なんておいしいんだろう。ぼくはとにかく夢中で食べた。ふと隣を見ると、デュークも一生懸命魚にかじりついていた。おいしい、とにかくおいしい。ぼくはとても幸せだった。食べ終わって顔をあげると、ブロとちび助が近くで食後の毛づくろいをしていた。

「ねえ、デューク。魚おいしかったね。」

「ああ、こんな丸ごとおいしい魚が食べられるなんて夢みたいだよ。前に一度、家でレストラン用に買っていた魚にかじりついたことがあったんだけど、ママにすごく怒られたんだ。それ以来魚にかじりつくなんてことはしたことがなかったけど、やっぱり魚はおいしんだな。」

デュークもとてもうれしそうだった。

「ヘル、デューク、魚おいしかった？」

ブロがやってきた。

「ブロ、すごいよ。君たちはいつもこんなにおいしい魚を食べているの？」

ぼくはうらやましい気持ちで聞いた。

「うん。あのおじさんとおばさんは今日みたいに天気がいいと船で魚を釣りに行って、戻ってくるとぼくたちネコにもたくさん

の魚をわけてくれるんだよ。」

なんていい人たちなんだ。

「でも、その魚をひとりじめしようとして意地悪するネコはいないのか？」

デュークが聞いた。

「そんなネコはここにはいないよ。だっておばさんはちゃんとみんなに魚をくれるし、ほかのネコに意地悪なんかしたって面白くないじゃないか。みんなで仲良くおいしいものを食べて、誰かと一緒に遊びたいときは一緒に遊んで、眠りたいときは寝る。それがぼくたちネコでしょ。」

ブロは当たり前のように答えた。

「そろそろこの弟のちび助が眠そうだから、ぼくたちはおうちに帰るよ。きみたちはどうする？この海辺も気持ちいいけど、むこうの町へ行くと人間の家やレストランもあって、ちょうど気持ちよく眠れるいいところもいっぱいあるよ。」

ブロは親切に教えてくれた。ブロもまた人間と一緒に暮らしているようだ。

「ありがとう、ブロ。ぼくたちはもう少しこの辺を散歩して、あとで町へ行ってみるよ。また明日会えるかな？」

ぼくが言うと、ブロは言った。

「もちろんだよ。ぼくたちも日中は外にいるから、さっきの海辺や町の中できっと会えるよ。」

教会の鐘が鳴っている。もう朝なんだ。ぼくたちは昨日ブロと

別れた後、港でそのまま眠ってしまったんだ。

「ヘル、おはよう。」

「デューク、もう起きてたの？」

「ああ。のどがかわいて、海の水を飲んだんだけど、塩っからかったよ。」

デュークはしぶい顔を作った。

「そうか。ぼくものどかわいたな。町へ行ったらまた噴水とかあるかもしれないね。」

ぼくたちは昨日ブロが帰って行った方角へ歩いて行った。

町では人間たちが朝の仕事をはじめていた。

お店に商品を並べている人たち、カフェのテーブルを用意しているひとたち。みんな忙しそう。ぼくたちはお店の前に水をまいて掃除している人を見つけた。

「あそこに水がたまっている。」

「あの水は今ホースから出たばかりの水だからおいしいはずだ。」

ぼくたちはそこに行って水を飲んだ。

「あらねこちゃんたち、のどがかわいているのね。」

そうすると、おばさんがお皿に水をいれてぼくたちの前に置いてくれた。

「どうぞ。」

ぼくとデュークは顔を見合わせて、一緒に水を飲んだ。おいしい。ぼくたちが水を飲んでいるのを、おばさんは笑顔で見つめている。

ぼくたちはまた歩きはじめた。

今度は市場を見つけた。オレンジ、ブドウ、メロンなどの果物や、トマト、キュウリ、マスやキノコなどがいっぱいならんでいる。

「ネコちゃんたち、おはよう。朝食の時間かい？」

そうすると、おじさんがオレンジをぼくたちにわけてくれた。ちょっとかじだったけど、すっぱくておいしくなかった。

「おいおい、ネコはオレンジは食べないよ。ほら、こっちはどうだい？」

もう一人のおじさんが、パンをちぎってわけてくれた。こっちはおいしかった。おじさんたち、ありがとう。

「ミャア。」

デュークとぼくはまた歩き始めた。このあたりは人間の家が並んでいる。

「ヘル、あの屋根の上に行ってみよう。」

デュークは言うのと、塀をつたって上手に屋根の上にはジャンプした。今日のデュークはとても元気だ。ぼくもあとに続いた。

「うわ、デューク、見て。さっきまでいた港が見えるよ。」

「うん。大きな船や小さなボートが停まっている。海もきれいだな。」

ぼくたちはこの気持ちいい場所で、少し昼寝をした。

それから、お昼にレストランで人間の食べ残しをわけてもらい、また昨日の浜辺に出た。

そこではもうブロとちび助が遊んでいた。

「やあ、ヘル、デューク。」

「ブロ、この島はとてもいいところだね。」

ぼくは真っ先に言った。朝おばさんがお水をくれたこと、市場でおじさんたちが朝食をわけてくれたこと、屋根からの眺めがきれいなことなどぼくとデュークは夢中でブロに報告した。

「ねえ、君たちはいったいどこからきたの？そんなことで驚くなんて、よほど恐ろしいところに住んでいるのかい？」

ぼくたちはここより北の町で人間の家族と一緒に住んでいて、今回はコウノトリさんにこの島に連れてきてもらったこと、そして早速意地悪なネコに会って、海に飛び込んでイルカさんにこの島に連れてきてもらったことを話した。

「君たちは本当にすごいネコだね。ネコが空や海を旅するなんて、聞いたことないよ。面白いな。でも、向かいの町にはそんな意地悪なネコがいたなんておどろいたな。この島ではそんなやつは見たことないよ。かわいそうなネコだな。」

ブロは一気に話した。

「かわいそう？」

デュークが聞いた。

「うん。きっとそいつは友達がいらないんだよ。だから友達とおいしいものを一緒に食べるとか、一緒に遊ぶとかそういう楽しいことがわからないんだ。かわいそうだと思うない？」

これまであの茶色のネコがかわいそうなネコだなんて思ったことは一度もなかったから、ぼくもデュークも何も答えられなかった。

「ねえ、それじゃヘルもデュークもまだ丘の上のほうには行っていないんだね。」

ブロは得意気に話し始めた。

「ここから向こうの方にはブドウ畑が広がっていて、そこをのぼると島が見渡せてとてもきれいなところがあるんだよ。よかったら今から行って見ない？」

「ブロ、もちろん行きたいよ。」

ぼくとデュークはブロたちのあとに続いて丘のほうへ歩いて行った。ブロは途中にある教会やお店の説明もしてくれた。

しばらく歩くと、ブドウ畑が広がっていた。

「このブドウで、人間はワインを作るんだって。」

「ワインか。パパとママが喜びそうだな。」

デュークが言った。

「チーコ、元気にしてる？」

ブロはブドウの葉を食べているヤギに話しかけた。チーコは眠そうにしっぽをふって答えた。

「到着。ここからのながめは最高だよ。」

ブロはうれしそうにぼくたちに言った。ぼくたちはブロと同じ方向を向いた。

「うわ。ぶどう畑の向こう側に海が広がっている。」

「すごくきれいだ。」

デュークもぼくもすっかりみとれてしまった。風が海の香りと緑の葉っぱの香りを運んできてくれて、とても清々しい。ぼくたちはそこでまた横になって気持ちのよい空気を思いきりすった。

「この島は本当に素敵なおとこだ。」

ぼくが言うと、ブロは言った。

「ヘルたちもこれからもずっとここにいればいいじゃないか。」

「えっ。」

「どうしてもその人間の家に戻らなければいけない理由なんてないんでしょ。」

ブロにそう言われると、そんな気もしてきた。向こうに戻って人間たちみたいに学校へ行ったり、仕事をしたりするわけじゃない。ここで気持ちのよい海のそばで、おいしい魚を食べてきれいな景色を見て、毎日楽しく過ごせたらどんなに幸せだろう。

「ミャア。ママ。あたたかい。」

ぼくがそんなことを考えていると、ブロのそばで気持ち良さそうに昼寝をしていたちび助が寝ごとを言った。

「ちび助のやつ、また夢を見ているんだ。きっと家でママのひざの上で温かい手でなでてもらっている夢だな。」

ブロはちび助をなめはじめた。そのとき、デュークの顔がちょっと悲しそうに見えた。

明日はイルカのクロナさんとカトルさんが迎えに来てくれる日だ。この間ブロに言われた言葉がまだぼくの頭のなかに残っている。どうしてもむこうに戻らなければいけない理由はない。でも、このままずっとこの島で暮らしつづけて本当にいいのだろうか。

「デューク、明日はイルカさんたちが迎えに来てくれるよ。」

ぼくが言うと、デュークは真剣な顔をしてぼくを見た。

「なあ、ヘル。ヘルはこの島に残りたいって思っているんじゃないのか？」

「えっ。うーん。正直なおとこ、よくわからないんだ。この島はほんとうにいいところだし、ブロやちび助と遊ぶのもとても楽しい。でもこのままここにいていいのかなって思うと、うれしいような、でもちょっと悲しいような。デュークはどう思う？」

「おれは帰るよ。ヘルの言うとおりに、この島はとても素敵なおとこだよ。本当に来てよかったと思う。でもこのままノラネコとしてここに残るのは、やっぱりおれはいやだな。パパとママに会いたい。」

デュークははっきりと言った。そうだ、ぼくもパパ、ママ、まりちゃんに会いたい。でも、ぼくが会いたいって思うように、みんなもぼくに会いたいって思ってくれているのかな。もうぼくのことなんか忘れているかもしれない。もしそうだったら、このままノラネコとして新しい生活をはじめるとも悪くないんじゃないかな。

「明日までゆっくり考えなよ。」

デュークは言うと、眠ってしまった。

翌朝、ぼくたちはブロとちび助にさようならを言った。

「ヘルもデュークも本当に帰っちゃうの？」

「うん。今日はイルカさんたちが迎えにきてくれるから、まず向こうの町に戻るよ。でも、ぼくはこの島がとても気に入ったから、もしかしたら戻ってくるかもしれない。」

ぼくに続いて、デュークが言った。

「おれは自分の町にもどるよ。ここはとても楽しかった。本当にありがとう。」

「ヘルもデュークも、いつでもまたここに戻って来れるんだから、そのことは絶対に忘れないでね。」

「ミャア。バイバイ。」

デュークとぼくは、イルカさんと別れた浜辺へむかった。

5

海辺の小石



波のゆれが激しくなったと思ったら、クロナさんたちが顔を出した。

「ヘルさん、デュークさん、お待たせ。」

クロナさんはぼくたちをみつけると言った。

「島の滞在は楽しかった？」

クロナさんが聞いた。

「はい。とてもいい島でした。友達もできて、おいしいものもいっぱい食べて、本当に楽しかったです。」

「そう、それはよかったわ。デュークさんもすっかり元気そうよかった。じゃあ向こうの町に戻りましょう。」

「あの、この間はぼくがおぼれているところを助けてくれて、ありがとうございました。」

デュークはクロナさんにお礼を言った。

「いえいえ、どういたしまして。あなたを助けたカトルは、今日はちょっと用事があってここには来れなかったから、友達のアランを連れてきたの。さあ、ふたりとも私たちの背中に乗って。」

ぼくはこの間と同じようにクロナさんの背中に、デュークはカトルさんの代わりに来てくれたアランさんの背中に乗って、町へ向かって出発した。

「カトルはね、今人間の女の子と一緒に泳いでいるのよ。」

クロナさんは話し始めた。

「その女の子は十歳なんだけど、七歳の時に両親が離婚したの。それがとてもショックだったみたいで、それから心を閉ざし

てしまったの。友達とも遊ばなくなって、自分の部屋にこもってしまうようになったんですって。私たちイルカは、そんな人間の子供たちの心を元気にするお手伝いができるのよ。はじめはとても悲しい顔をしていた子供たちも、私たちと一緒に海で泳いでいると、どんどん元気になって、また明るい笑顔を取り戻すの。カトルは特に、それがとてもうれしいみたい。」

ぼくはまりちゃんのことを思い出した。まりちゃんももしかしたら、ぼくがいなくなってすごく悲しい思いをしているかもしれない。

「あなたたちネコさんも、人間と一緒に暮らすことで、人間に温かい気持ちを分けることができるのよね。そういうのって、うれしいわよね。」

クロナさんは微笑んで言った。

向かいの町の海岸に到着した。ぼくたちはクロナさんとアランさんにお礼を言って浜辺へおりた。

海岸沿いに大きな建物があった。そこでは楽しそうな顔をした人間たちが集まって食事をしていたり、浜辺のベッドに寝転んだりしていた。これが、人間たちが泊るホテルなのかな。

「またこの薄汚いネコがうちのかわいいミーちゃんの食事を盗んだのよ。もうさっさと遠くに捨てて来てちょうだい。」

とつぜん大きな声があった。大きな帽子をかぶって、黒いサングラスをかけ、派手な黄色いワンピースを着たおばさんが、グレーの毛がつややかに光るネコを抱いて、ホテルの人に文句を言っていた。

「うちのミーちゃんのように美しく品のいいネコちゃんが泊るホテルに、あんな汚れた意地きたないノラネコを入れるなんて、おたくの管理はどうなっているのかしら。」

「申し訳ございません、マダム。このネコはすぐに処分させていただきます。」

ホテルの係の人はそう言うと、ネコをかごの中に押し込めた。よく見ると、そのネコはあの焦げ茶色の意地悪なネコだった。

「ニャア、ニャア。ちがうよ、おれは盗んだりなんかしてないよ。出してくれよ。」

焦げ茶色のネコは一生懸命叫んでいた。

「おれはただあのネコの前を通りかかっただけだ。そしたらあいつの方からおれに、自分が食べていた肉を放って来たんだ。毎日毎日こんなお肉ばかり食べててもうあきた、おまえのようなノラネコはこんな高級なお肉食べたことないだろうからめぐんでやるってニヤニヤしながら言ったんだ。おれ、すごく腹立ったけど、本当にあんなに美味しいお肉を食べたことなかったからつい食べちゃったんだよ。それだけだよ。」

ミーちゃんと呼ばれていたネコのほうを見ると、焦げ茶色のネコを見て鼻で笑っていた。

「ミーちゃん、行きましょう。」

おばさんが言うと、ミーちゃんも甘えた声を出してそのままむこうへ行ってしまった。

「やれやれ、よりによってスミスさんの奥様を怒らせるなんてな。今日はついてないな。さっさとこのネコを裏山のゴミ処理

場へ持って行くか。」

ホテルの人はそう言うと、焦げ茶色のネコを入れたかごを持って、車の方へ向かった。

「おい、だれか、助けてくれよ。おれは何も悪いことしてないんだよ。」

焦げ茶色のネコはまだ叫んでいた。

「デューク、あのネコ。」

ぼくが言うと、デュークも言った。

「ああ、あの意地悪なネコだな。」

ぼくとデュークは何も言わずに、ホテルの人のあとをついていった。

ホテルで働いている人たちが乗る、少し大きめの車が停まっていた。

「あれ、車のかぎ、部屋に置いたままだったな。」

ホテルの人はそう言うと、ネコかごをその場に置いて建物の中へ入って行った。

「ニャーオ。おれはどうしていつもこうなんだ。あいつ腹が立ったけど、美味しいお肉のお礼に、いつもの魚を食べれる場所を教えてやろうと思っていたのに、結局あいつはおれをただの汚いネコだとしか思っていなかったんだ。もしかしたら今度は、って思ったけど、やっぱり友達になんてなれないんだよな。」

焦げ茶色のネコは、かごの奥で悲しそうにつぶやいていた。

「デューク。どうする？」

「どうするって、どうするんだ？」

そのとき、遠くのほうからさっきの人間の足音がした。デュークとぼくはとっさにねこかごに近づいた。これはぼくが病院へ行くときにパパがぼくを入れるかごと同じだ。

「デューク、ぼくがここをおさえているから、その間にここをひっぱってドアをあけよう。」

「ああ。」

ぼくとデュークはあわてていたから、なかなかうまく扉をあけることができなかった。

「こら、そこのネコども。いったい何をしているんだ。」

ホテルの人間がぼくたちに気づいた。ぼくはあせる気持ちを落ち着かせて、せいいっぱいとしてを上から押して、デュークがドアを開けた。

「早く、ここから逃げるんだ。」

「おまえら、どうして。」

焦げ茶色のネコはおどろいて言った。

「いそいで。」

ぼくは言うと、デュークと一緒に走り出していた。焦げ茶色のネコも、人間がかごに手をかけようとした直前にあわててかごの外に出て、全速力で走り始めた。

「こっちだ。」

ぼくがどっちへ行ったらいいのか迷っていると、焦げ茶色のネコが後ろから来て言った。

ぼくらはしばらくすごい速さで走った。後ろから人間はおいかけてきていなかった。ぼくたちは高い塀のすきまに入って、草

むらに出た。

「はあ、危機一髪だったね。」

ぼくは言った。

「ああ、うまくいったな。」

デュークも言った。

「おまえたち、おれがだれだかわかっているのか？」

焦げ茶色のネコは言った。

「さあ、名前は聞いてなかったね。会うのは初めてじゃないけど。ぼくの名前はヘル。」

「おれはデューク。」

「お、おれは、モッシュだ。」

ぼくは鼻をモッシュに近づけた。モッシュは一瞬後ろに下がったけど、ぼくの目を見て近づいて鼻をつけてあいさつした。

「お、おまえたち、おれとどこで会ったか覚えてないのか？」

「覚えてるよ。はじめはレストランで魚を食べたあと、そしてそのあとは船の中。」

ぼくが言うと、デュークが続けた。

「そうそう、あそこで海に落ちてから、イルカに助けられて、すごく楽しい島に連れて行ってもらったんだ。モッシュのおかげだな。」

「おまえたち、何かたくらんでるのか。」

急にデュークに感謝されて、モッシュはまた警戒した様子で言った。

「たくらむってどういうこと？」

ぼくが聞くと、モッシュは答えた。

「だから、おれを助けるふりをして、さんざん走って疲れさせたあと、さっきの人間に改めておれを引き渡す取引きをしているとか。」

ぼくもデュークもあっけにとられた。どうしてモッシュを疲れさせるために、ぼくたちまで危ない橋を渡って全速力で走る必要があるというのか、まったくわからない。

「たくらむといえ、そうだな、またレストランのおいしい魚が食べたいな。」

「そうだね、あの島では生の魚を丸ごと食べたけど、久しぶりにレストランでおいしく調理した魚が食べたいね。」

デュークとぼくは言った。モッシュはまだぼくたちのことを信用していない様子だった。

「そしておれをレストランに連れて行って、そこで人間に引き渡すつもりか。」

「モッシュはどうして、さっきから引き渡すとかわけのわからないことを言っているの？」

ぼくはほんとうにわけがわからなくて言った。

「じゃあ、なんでおれを助けたりしたんだ。」

モッシュははっきりと言った。

「困っているネコがいたら助ける、おいしいものがあったら一緒に食べる、そして遊びたいときに楽しく一緒に遊んで、寝たいときに寝る、それがネコ、それが友達でしょ。」

ぼくが言うと、デュークもうなずいた。

「友達？おまえたち、おれを友達だと思ってくれるのか？」

「レストランの魚、一緒に食べに行くか？」

デュークが聞いた。

「あ、ああ。行こう。この間のところより、もっとおいしくて、もっとたくさん魚を分けてくれるところがあるんだ。そこへ案内してやるよ。」

モッシュは得意気に言った。

ぼくたちはこうして今度はモッシュにおいしいものを食べられるところや、きれいな景色を見渡せるところ、気持ちよく昼寝ができる場所などを教えてもらって、楽しく過ごした。そしてついに、コウノトリのシュウさんの友達がぼくたちを迎えにきて来る日が翌日となった。ぼくとデュークは、モッシュが教えてくれたレストランでおいしい夕食をすませた後、いつものように毛づくろいをしていた。

「なあ、ヘル。ヘルはこのままここに残ってモッシュと遊んだり、向かいの島に行ってブロやちび助たちと遊んだりすることもできるんだぞ。あの島を出るとき、まだどうしたいかわからないって言ってたけど、どうするか決まったのか？」

デュークは聞いた。

「うん、決まったよ。」

ぼくは元気に言った。

「ぼくは本当にここが気に入った。友達もできたし、おいしい

ものも食べれるし、暖かい太陽の光もいっぱいあびることができ
きる。」

「そうか。」

デュークはちょっと小さな声で言った。

「でも、ぼくはデュークと一緒におうちに帰る。」

「えっ？今、なんて？」

デュークは目を大きく開いて言った。

「ぼく、デュークと一緒におうちに帰るよ。ぼくがこうして見知らぬ場所に来て、楽しく過ごせたのも、おうちでパパとママ、そしてまりちゃんの温かい気持ちに囲まれて過ごすことができるからなんだと思う。それに、何より。」

ぼくはデューク目をまっすぐ見た。

「デュークと離ればなれになるなんて、ぼくはできないよ。」

「ヘル、おれだっていやだよ。」

デュークはぼくのところにきて、ぼくの体をペロペロなめはじめた。そして、ぼくたちはそのまま眠ってしまった。

翌朝、ぼくたちはモッシュにお別れを言った。モッシュにも向かいの島の、ブロとちび助のところへ遊びにいてみることをお勧めした。そして、シュウさんのお友達がぼくたちを迎えにきてくれて、またこの間と同じように、大きな袋の中に入って、空を渡った。

ぼくはおうちに戻って来た。

「ヘル！ヘルが帰って来たわよ。」

ぼくをみつけて、ママが大きな声で叫ぶと、パパもまりちゃんもぼくのところにかけつけた。

「ヘル、もう帰ってこないんじゃないかと思って心配したのよ。ヘル、本当にどこに行ってたの？」

まりちゃんはぼくを抱えて泣いていた。

「ミャーオ。まりちゃん、心配かけてごめんね。」

ぼくはまりちゃんにあやまると、まりちゃんの手を一生懸命なめた。

「あれ、ママこれどうしたの？」

パパがテーブルの上に置いてある小さな袋をみつけて言った。

「何のこと？」

「この袋、ぼくたちの知らない言葉が書かれているよ。」

パパはそういって、袋を開けて中のものを手のひらに出した。

「小石だ。これ、海辺の小石じゃないかな？」

「どれどれ、パパ、見せて。」

まりちゃんもパパのところに言って小石を手にした。

「うわー、きれいな小石。」

「えー、それ誰が持ってきたの？パパでもまりでもないの？」

ママが言うと、三人とも不思議そうな顔をして小石を眺めた。そう、それは、ぼくがみんなへのおみやげに、海辺できれいな小石をみつけて、その近くに落ちていた小さな袋に入れて持ってきたんだ。

「これ、ヘルからのおみやげじゃないの？」

まりちゃんはぼくを見て言った。

「ミャア。そうだよ、まりちゃん。」

ぼくはごきげんに答えた。

「まあ、まりったら。そうね、きっとヘルがどこかの海辺でこのきれいな小石を拾って来てくれたのかもしれないわね。」

ママがそう言うと、みんなで笑った。

翌日、パパは会社に行くと、出発前にぼくとデュークがサインをした参加申込書を引き出しから出した。

「もしかしてこの参加申込書のサインはヘルとヘルの友達のものだったのか？」

パパは首をかしげて、またそれを引き出しの中にしまった。